

# 日本英文学会 北海道支部 第64回大会プログラム

日時：令和元年11月30日(土)

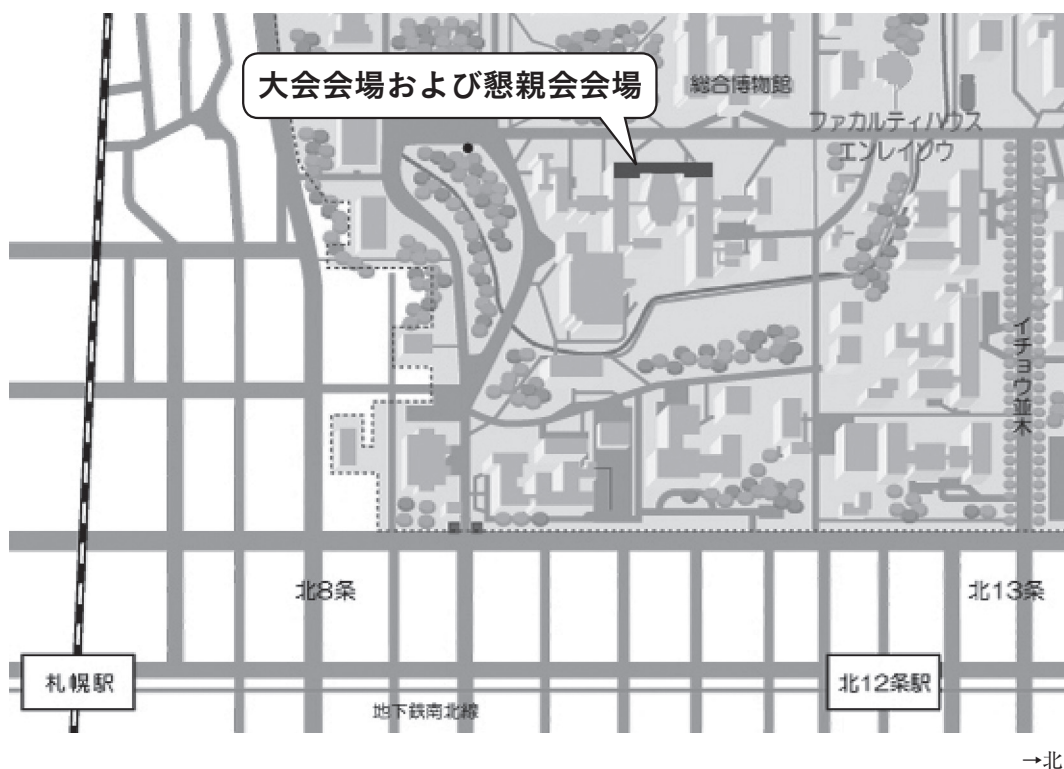
会場：北海道大学 人文社会科学総合教育研究棟(W棟)

(札幌市北区北10条西7丁目)



〈会場アクセス・地図〉

- ・JR「札幌駅」(西改札口・北口)から徒歩12分
- ・地下鉄南北線「北12条駅」から徒歩10分



〈懇親会のご案内〉

日時：11月30日(土)18:20～20:00

場所：W棟3階308教室

会費：一般4,000円、学生3,000円

\*懇親会参加希望の方は、11月14日(木)までに下記までお申し込みください。

事務局：hokkaido@elsj.org

(件名を「支部大会懇親会参加申込」として下さい)

\*発表者・参加者控室 W307教室(茶菓の用意があります)

## 日本英文学会北海道支部第64回大会プログラム

日時：令和元年11月30日(土)  
会場：北海道大学 人文社会科学総合教育研究棟(W棟)  
(札幌市北区北10条西7丁目)

**受付開始** (9:20～)(W棟3階309教室前)

**開会式** (9:40～)(W棟3階309教室)

開会の辞

日本英文学会北海道支部支部長 上野誠治

**理事会** (12:15～)(W棟3階307教室)

〈文学部門〉(W棟3階309教室)

**研究発表** (10:00～11:55)

1. (10:00～10:35)

司会 北海道教育大学函館校 星野立子  
蛭川シェイクスピアに見るグローバル・シェイクスピアの限界と可能性  
北海道大学大学院 和田哉恵

2. (10:35～11:10)

司会 北海道教育大学旭川校 十枝内康隆  
W. B. Yeats の“Byzantium”を教室で読む  
酪農学園大学 藤田佳也

〈休憩〉

3. (11:20～11:55)

司会 札幌市立大学 松井美穂  
ホームの中に埋められたもの  
北海道大学大学院 南宮頌

**特別講演** (13:20～14:20)

司会 札幌学院大学 岡崎清  
アメリカ文学に見る都市の理解と未来  
東京工業大学名誉教授 上西哲雄

**シンポジウム** (14:35～17:35)

イシグロの世界をひらく

司会・講師 北海学園大学 森川慎也  
講師 京都外国語短期大学 莊中孝之  
講師 千葉工業大学 三村尚央

〈語学部門〉 (W棟 3階 308教室)

研究発表 (10:00～11:10)

1. (10:00～10:35)

司会 北海道大学 野村 益 寛  
日本語の語彙的複合動詞の主要部—統語的複合動詞としての再分析を中心に—  
北海道大学大学院 中村 早百合

2. (10:35～11:10)

英語の話し言葉における *though* 節の独立用法—コーパスを用いた分析—  
旭川工業高等専門学校 水野 優 子

セミナー (11:20～12:10)

司会 札幌大学 時崎 久 夫  
統語的複合動詞構文の分類について  
北海道大学 大野 公 裕

特別講演 (13:20～14:20)

司会 北海道大学 奥 聡  
植物と言語表現—生物学的見地の導入—  
大阪教育大学 松本 マスミ

シンポジウム (14:35～17:35)

日英比較統語論の現在  
司会・講師 旭川医科大学 戸塚 将  
講師 旭川医科大学 三好 暢 博  
講師 福井大学 中村 太 一

総会・閉会式 (17:40～)(W棟 3階 309教室)

閉会の辞 日本英文学会北海道支部副支部長 本堂 知彦

懇親会 (18:20～20:00)

場所：W棟 3階 308教室

〈発表要旨〉

## 〈文学部門：研究発表〉

蜷川シェイクスピアに見るグローバル・シェイクスピアの限界と可能性

和田 哉恵（北海道大学大学院）

蜷川幸雄(1935-2016)によるシェイクスピア演劇作品の研究史を整理し、その変遷を辿りながら、今後展望する。蜷川は1985年にEdinburgh Festivalでの*Ninagawa Macbeth*の上演によって世界に衝撃を与えて以降、世界に名を轟かせる現代シェイクスピア劇演出家の一人である。彼の能や歌舞伎などといった日本伝統芸能や、桜や仏壇、ひな壇といった日本伝統の「美」を介して演じられるシェイクスピア作品はその芸術性について高評価を得ている一方、その内容や「シェイクスピア」作品としての本質に対する疑問や表象の上での日本伝統芸術の取り扱い方など多くの批判も挙げられている。本発表では、蜷川シェイクスピアをトランスナショナルやトランスカルチュラルな観点から精査し、未だ確立されていない蜷川研究史を通して見えてくる、グローバル・シェイクスピアの可能性と限界を紹介したい。

W. B. Yeats の “Byzantium” を教室で読む

藤田 佳也（酪農学園大学）

W. B. Yeats の “Byzantium” は、対立する二つの世界が拮抗する様子を描いている。感覚と知性、自然と超自然、この世とあの世、肉体と魂、呼び方はさまざまだが、二つの世界の葛藤が描かれているという点で、これまでの研究は一致している。一方、この詩においては、単語、フレーズ、さらにはセンテンスの構造にいたるまで、さまざまな反復がみられる。全く同一の表現が繰り返される場合もあるが、微妙な差異をともなって反復される場合もある。本発表では、この “Byzantium” を教室において読む一つの方法について考察してみたい。この詩における二つの世界の描写を区別したうえで、さまざまな反復について整理して考えることを通して、反復がこの二つの世界の拮抗した状況を表すのに非常に効果的に働いていること、そして両者のダイナミックな相互作用こそがイエイツの描こうとしたものであることを学生たちと確認するのが、教室におけるひとつの目標である。

ホームの中に埋められたもの

南宮 頌（北海道大学大学院）

トニ・モリソンの『ホーム』(2012)では、朝鮮戦争時の人種統合軍隊 (Integrated Army) に所属したアフリカ系アメリカ軍人の主人公 Frank Money が自らを物語る。米国では人種差別の被害者である彼の心の底には人種、ジェンダー、ナショナリズム、そしてオリエンタリズムの問題に囚われている英雄的男性性願望が秘匿されている。両国で自分の男性性を誇示するために、彼は性的被害者の女性二人を消費し、自らの英雄性を強調し続ける。韓国で彼は韓国人の少女を殺すことによって彼女に対する自分の国家とジェンダーの両属性における優位性を獲得する。このような彼の暴力は1950年代の米国が第三世界に対して行った独善性と同じだ。帰国し、彼は自分の妹

Ycidraを助けることで再び自分の男性性を誇示しようとする。そして最後に、Frankは自らの罪を隠蔽するために、Jeromeの父の骨をYcidraのキルトに包んで埋葬する。しかし、男が告白する人間性回復の物語は一時的なものだと、モリソンは痛烈に批判している。

## 〈文学部門：特別講演〉

アメリカ文学に見る都市の理解と未来

上西 哲雄（東京工業大学名誉教授）

ここ数年の急激なコンピュータ技術の進化に伴い、人工知能(AI)が全人類の知性の総和を超える技術的特異点(Technological Singularity)が2045年には訪れるという話が、かまびすしく論じられている。すでに20世紀末のインターネットの普及の開始によって、人類の社会や生活の空間的枠組みが、20世紀への世紀転換期の様々な技術革新による劇的な変化以来の規模で、大きく変化してきている。このような新しい風景に身を置いて振り返った時、文学はどのように読むべきか、アメリカ文学における都市の描かれ方を具体的な対象としてご一緒に考えてみたい。都市論ということで言うならば、北海道にはいずれも高名なる伊藤章先生、野坂政司先生、本城誠二先生らによる『ポストモダン都市ニューヨーク』という名著がある。講演者は、敬愛する3氏の釈迦の掌の上を飛び回る孫悟空の覚悟で、謙虚に緊張感を持って登壇する所存である。

## 〈文学部門：シンポジウム〉

イシグロの世界をひらく

司会・講師 森川 慎也（北海学園大学）

講師 莊中 孝之（京都外国語短期大学）

講師 三村 尚央（千葉工業大学）

ノーベル文学賞受賞以降、カズオ・イシグロの文学に対する学術的関心はますます高まっている。過去二年間のイシグロ関連の出版物は書籍だけでも七点に及ぶ。学会発表・シンポジウムでも彼の作品はよく取り上げられ、中世からモダニズムそして現代まで様々な英文学作品と関連づけて論じられてきた。ただし従来の研究は特定の作品を論じたものが多く、彼の伝記的側面、文化的影響、特定概念の拡張については十分に検討されてこなかった感がある。そこで本シンポジウムでは彼の作家形成に着目する。森川はイシグロが父と祖父から受け継いだ特質を、莊中はイシグロ作品におけるアメリカ大衆文化の影響を、三村はイシグロ文学で再現される記憶の手触りと記憶概念の拡張を考察する。シンポジウムならではの複眼的視点からイシグロの世界をひらくことができればと思う。

## 祖父と父からイシグロが受け継いだもの

森川 慎也 (北海学園大学)

イシグロが彼の祖父や父にしばしば言及するのは、単なる郷愁的感情からではなく、イシグロ自身の世界観に彼らが大きな影響を与えたからではないか。本報告では、伝記的観点から立てたこの仮説を検証すべく、イシグロ文学と祖父・父との関係性を考察する。イシグロの祖父・父については平井杏子氏による研究が詳しい。日中共存を旗印に20世紀初頭の上海に創立された東亜同文書院を卒業した祖父昌明はトヨタ紡織廠の設立に関わり、数十年間上海で暮した。父鎮雄も七歳まで上海の共同租界で過ごし、戦後は海洋学の分野で活躍した。彼らからイシグロは何を受け継いだのか。彼の文学に顕著に見られる幾つかなの特質と関連づけて考えてみたい。

## カズオ・イシグロの作品におけるアメリカ大衆文化の受容

荘中 孝之 (京都外国語短期大学)

イシグロはこれまでいくつかのインタビューや講演などで、好きなアメリカのアーティストや映画のタイトルをたびたび口にしてきた。しかし従来の研究では小津や成瀬などの日本映画との関係はある程度考察されてきたが、彼の創作におけるそれらアメリカン・ポピュラー・カルチャーの影響については、十分な注意が払われてきたとは言えない。またそこではかなりの音楽愛好家であった父の存在も無視できないと思われるが、その点についてもまだ考察の余地は残されているだろう。この報告ではイシグロとアメリカの映画や音楽などの大衆文化、そして父との関係を整理して、具体的にいくつかのテキストを比較分析し、さらに草稿研究なども参照することで、イシグロの創作においてそれらがいかに重要であるかということを示してみたい。

## カズオ・イシグロの「記憶の手触り」を再考する

三村 尚央 (千葉工業大学)

イシグロが記憶の手触り (texture of memory) を作品中で再現することを自らの使命としていることは、彼自身が折に触れて明言している。記憶の曖昧さを強調する初期作品から、最近作 *The Buried Giant* (2015) での「忘却の霧」に覆われた世界にいたるまで、イシグロは少しずつ力点をシフトさせながら記憶概念を拡張させてきた。イシグロだけでなく我々がなぜこれほど「記憶」というテーマに惹かれるのか、本報告では作品中の記憶描写の変遷を検証することに加えて、近年の記憶研究 (Memory Studies) の成果も参照しながら見直してゆきたい。本報告の骨子を示しておくなら、「忘却の霧」に充ちた *The Buried Giant* の一見不安定な世界を支えているのが、記憶のたしかな手触りだということになるだろう。



## 〈語学部門：研究発表〉

日本語の語彙的複合動詞の主要部  
—統語的複合動詞としての再分析を中心に—

中村 早百合 (北海道大学大学院)

本研究の目的は、従来影山(1993)で語彙的複合動詞として分類されてきたものの一部は統語的複合動詞として再分析できるという可能性について、主要部の観点から統語的に論じることである。さらに、その場合に生じる Huang (1982)による「付加詞条件」との理論的不整合性の問題に対して、考え得る具体的な説明・解決方法を提示する。

影山(1993)によれば、統語的複合動詞とは、複合動詞の後項動詞(以下V2)が、前項動詞(以下V1)を主要部とする動詞句(VP1)を補部にとるもので、語彙的複合動詞とは、V1とV2が直接結合して一語の複合動詞を形成するものである。ここで、一部の語彙的複合動詞の意味的な主要部は左側であると主張される場合があるが、主要部とはあくまで統語的な概念であるため、本研究ではそれらの複合動詞の主要部も右側であると主張するとともに、格付与の観点からV2主要部が主張できない例は統語的複合動詞であるとして再分析する可能性を示す。

英語の話し言葉における though 節の独立用法  
—コーパスを用いた分析—

水野 優子 (旭川工業高等専門学校)

複文は、伝統的に等位接続と従位接続に2分され、副詞節は従属節として分類されてきた。しかし近年、because節などのこれまで副詞節とみなされてきた節が、独立節として用いられる例が報告されている(Higashiizumi 2006)。一方、though節については、これまで独立節としての用法は指摘されてこなかった。

本発表は、電子コーパス *The Corpus of Contemporary American English* の話し言葉セクションから収集したターンの最初に現れる though 節のデータに基づき、though 節にも独立用法があることを示す。そして、それらの話し言葉における談話機能を明らかにする。具体的には、独立節としての though 節には、「自己訂正」(self-correction)と「不同意」(disagreement)という2つの機能があることを示す。さらに、though 節の独立用法は、文法化の節接続に関する単方向性の仮説(Hopper and Traugott 1993)への反例となる可能性があることを指摘する。

## 〈語学部門：セミナー〉

統語的複合動詞構文の分類について

大野 公裕 (北海道大学)

日本語の統語的複合動詞構文は影山(1993)以来、以下の(1)-(3)に示すように、3種類存在すると一般に考えられてきた。統語的複合動詞構文はまず後部動詞が上昇動詞(1)かコントロール動詞(2)-(3)かで大きく2つに分かれ、コントロール動詞はその補部が外項(PRO主語)を持つ(2)

か持たない(3)かでさらに2つに分かれる(Kageyama 2016も参照)。

- (1) 太郎が<sub>i</sub>[<sub>t<sub>i</sub></sub>[ピザを作り]]すぎた。
- (2) 太郎が<sub>i</sub>[PRO<sub>i</sub>[ピザを作り]]飽きた。
- (3) 太郎が[ピザを作り]直した。

そうすると、(1)に分類される上昇動詞の中にも外項を持たない補部をとるものが存在することが予測される。本発表では、(4)のような文がまさにその予測通りの構文であることを焦点要素のスコープ解釈、動詞句イディオム、謙譲語化などを証拠に論じる。

- (4) ピザが<sub>i</sub>[<sub>t<sub>i</sub></sub>作り]終わった。

本発表の主張が正しければ、統語的複合動詞構文は4種類存在することになり、従来の分類は見直しが必要になる。

## 〈語学部門：特別講演〉

植物と言語表現  
—生物学的見地の導入—

松本 マスミ (大阪教育大学)

植物は生物であるが、言語表現では、しばしば生物でないような扱いを受けることがある。その理由のひとつとして、同じく生物であるヒトが持つ「意志」や「感情」が植物にはないことがあげられる。Germinate, grow, flower, bloomのような英語の園芸書でよく見られる自動詞は、植物が「内発的な力」によって自分自身を変化させることを述べる動詞であり、「意志」を行使しないというのが典型的なスル動詞との相違点である。また、植物の「固着性」「可塑性」という生物学的特徴は、言語学の「移動」「変化」の概念にそれぞれ対応している。

本発表では、植物とヒトの言語学的・生物学的特徴にもとづいて、植物についての英語と日本語の表現を形態・統語・意味の側面から考察することにより、植物とことばとヒトの関係を明らかにしていきたい。

## 〈語学部門：シンポジウム〉

日英比較統語論の現在

司会・講師 戸塚 将 (旭川医科大学)  
講師 三好 暢博 (旭川医科大学)  
講師 中村 太一 (福井大学)

本シンポジウムの目的は、近年の生成文法の極小主義プログラムの進展を基に日本語と英語の比較を行うことで、両言語に見られる普遍性と差異を生み出す言語のメカニズムを考察することにある。両言語の比較統語論は生成文法研究にとって大きな理論的貢献を果たしてきた。特に Fukui (1986, 1988) や Kuroda (1988) は日本語と英語に見られる様々な差異を、人間言語に固有の

現象である一致 (agreement) という視点から捉えたものであり、今でもその理論的洞察は有効である。本シンポジウムでは、これらの研究を現在の極小主義プログラムの視点から再解釈することで、さらなる生成文法理論の深化を試みる。各講師の発表はそれぞれ、動詞の内項の認可条件、日本語の格助詞とラベル理論との関係、日本語と英語の話題化構文の比較をテーマに扱う。

### 内項およびそれに準じる表現の認可条件についての一考察

中村 太一 (福井大学)

本発表では、動詞の内項およびそれに準じる表現の認可条件について考察する。動詞によっては、例えば *serve* のように複数の内項をとり、それら内項が単文内で共起する場合がある。また、内項を1つとる動詞については、当該内項が、例えば経路表現のような表現と共起することができる。しかし、そこには語順等の様々な制限が観察され、また、一般に共起が許されないとされる表現の組み合わせも存在する。本発表では、単文で用いるのと同じ意味を維持する (単一の出来事・状況を表す) が、当該表現が *and* で等位接続された文においては、それら制限が緩和される、または新たな制限が観察されるように見える場合があることを指摘し、これら制限がどのような理由により生じる、または緩和されるのか説明することを試みる。

### Kuroda (1988) の格助詞の分析とラベル付け理論について

三好 暢博 (旭川医科大学)

一致現象は人間言語に固有の現象であり、この現象の背後にあるメカニズム解明は言語理論の構築において必須の課題である。現行のラベル付け理論 (Chomsky 2013, 2015) の下では、従来の指定部-主要部間の一致 (Spec-Head Agreement) は、句構造構築に関する演算の反映であるという仮説を出発点とすると、Kuroda (1988) の日英の類型論的差異が Spec-Head Agreement が義務的か否かという差異に還元されるという提案を再解釈することは、理論的に重要な作業である。この発表の目的は、Kuroda の格助詞「を」に対する洞察を、ラベル付け理論に落とし込み、その含意を明らかにすることにある。具体的には、Saito (2014, 2016, 2017) のいわゆる日本語の格助詞が *anti-labeling device* として機能するという提案している。本分析では、格助詞の省略とかき混ぜの可否、肯定対極表現の反認可と救済効果等では、格助詞の顕在化が関係していることを示し、非顕在的な格助詞が *anti-labeling device* として機能することがないことを論じる。

### 話題化構文から見る日本語と英語の比較統語論

戸塚 将 (旭川医科大学)

本発表の目的は、日本語と英語の話題化構文の比較を通して、両言語に見られる特性を明らかにすることである。日本語における話題化構文は、英語と比べると、自由に生成されるということが観察されている。例えば、日本語では多重話題化が許されるが、英語においては許されない。しかしながら、Radford (2013, 2018) によって示された口語英語では、これまで英語においては許されないとされていた多重話題化構文などの興味深いデータが示されている。この新たな事実を踏まえて両言語の比較をすることで、これらの根本にどのような原理が働いているのかを考察

していく。具体的には、Chomsky (2013, 2015) のラベル付けアルゴリズムと Saito (2016) の反ラベル装置を用いて説明できる可能性について考察する。